

三菱ファーマーズ・ワークショップ開催 (第2回目)

～未来をかたちにする

三菱商事は4月24・25日、三菱商事本店(東京都千代田区)において1月に引き続き三菱ファーマーズ・ワークショップを開催した。今回は全国の農業生産法人および関係者100名以上が参加し、研修会とテーマ別の分科会を行なった。

研修会講演

初日は主催の三菱商事株式会社 農産本部 青果物チーム 小出チームリーダーの開催挨拶ののち、3名の講師より講演を頂いた。まず田牧ファームズ代表取締役会長 田牧一郎様より「日本における低コスト稲作の可能性」についてご講演頂いた。田牧氏は日本における稲作の可能性として45%のコストダウンが図れると示唆された。また、TPP成立後はSBS米の10万トンだけでなく加工米や細米で最大150～200万トンは入ってくるかもしれないと予測され、現在の残りの需要量である約500万トンが国内間での販売競争になるとの見方を披露された。そして、稲作生産者として生き残るためには「良い米を安く提供できるか」にかかっていると強調された。最後に海外への輸出を今後検討する場合についてまずは現場に出て経験しノウハウを蓄積するしかないと言われたが、海外のコメ市場はまだ確立されておらず未知数であるとの話もあった。

次に株式会社林牧場 林邦雄様より「カッコいい農業をやりたい」と題してご講演頂いた。養豚農家の現状として過去40年間で98%減となっている。減少理由としては後継者がいない、周囲の都市化、経営難が原因で今後、廃業が続くと見られている。しかし、日本の豚価は世界で一番高価であるものの、国内でも国産豚のニーズが確り存在する。昔から外圧にさらされて来た業界のため今後も問題なく乗り越えていけると、力強い説明があった。また、養豚業を特殊な産業としてではなく普通の産業として捉え、日本の製造業に学んで肥育管理を追及する事で利益を追求、人材確保については積極的にリクナビを活用し大卒社員を採用し優秀な人材を登用、計数管理は同業者との交流で情報交換を行う事で問題点を指摘し合い改善に努めていると説明がなされた。最後に養豚業のモデルとしてデンマークを挙げられた。デンマークでの養豚業は国の基幹産業として位置づけられており若者に人気のある産業となっているようだ。日本でも養豚業は「田舎のヒーローになれるチャンス」があると夢を語られた。

最後に富士通株式会社 山崎富弘様より「圃場管理システム活用の現況と課題」としてご講演頂いた。ITを活用した圃場管理システムの利点は情報を入力する事により過去の実績を振り返り、失敗しないよう経営するための道具であると説明。ITが出来る事として人間の頭で処理していた能力を「見える化」させ、今まで費やしていた事務処理を簡便・マニュアル化し取りたい情報を抽出、経営に役立てる事が可能とされた。現況は農業の実態に即したシステムの開発がまだ発展途上にある事でノウハウの蓄積中であることが伺えた。また、システムを導入している経営者からの意見として従業員の考え方が変わったとして評価しているという報告があった。

課題別分科会

2日目の分科会では第一回目の開催時に討議された課題点を未来のかたちにするべく4つの討議内容を事務局が用意、グループディスカッションが行なわれた。朝9時半より昼食を挟んで

(次ページへ続く)



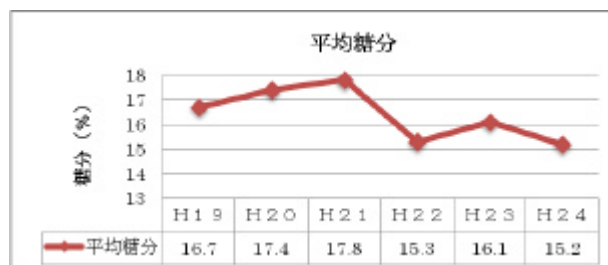
(前ページより続く)

実働約5時間にわたる活発な討議が行なわれ課題に対する方向性や問題点を洗い出した。最後に三菱商事株式会社農水産本部米チーム山口チームリーダーより、商社機能を発揮し日本農業が変革期に来ている中で参加頂いた皆様と日本の農業を引っ張っていく気概を持って今後は事業化も視野に入れた取組みを行なっていくと決意表明がなされた。三菱商事は講演内容・分科会を通じて農業分野での新規事業化に向けた諸課題を再度検討し一歩前進させたい様子が伺えた。今後の動向に注目したい。

近年のてん菜における低糖分について



てん菜はビート又は砂糖大根とも呼ばれ北海道でのみ栽培されている作物である。平成24年産の栽培面積は5万9千ha、生産量は375万トで、これを製糖する事で得られる砂糖は約56万トとされ、日本で生産される砂糖の5分の4を占めると言われている。また、てん菜は輪作体系を維持する上からも、本道畑作農業における重要な基幹作物であるばかりでなく、製糖工場や原料てん菜の運搬業者などの事業活動を通じ、本道地域経済の重要な役割を担っている。然しながら、高齢化による労働力不足、更には近年の天候不順による収量減少や低糖分を背景に栽培面積は減少の一途をたどり、最盛期には約7万5千haあったものが、現在は約5万9千haにまで減少している。



てん菜は作柄判断として糖分を基準とするが、平成22年から24年まで3年連続で低糖分が続いている。内訳を見ると全道平均糖分は、平成22年は

*糖分0.1%ごとに生産者への支払いが増減するため、糖分の低下は深刻である。

15.3%、これは過去20年間で2番目に低く、平成23年は16.1%で5番目に低く、平成24年は15.2%と最低になった(北海道:近年におけるてん菜低糖分の要因と対策より)。てん菜は高温と湿害により糖分低下につながる傾向があるとされており、平成22年から24年の気象を見ると、平成22年は6月から9月の気温が高く、平成23年は7月から9月に気温が高い。平成24年は8月下旬から10月上旬まで気温が高い。降水量は平成22年から24年のいずれも生育期間の積算降水量が平年を上回った結果となっている。

まとめると、近年道内でも気候の変化が指摘され気温は上昇傾向を強めており、平成22~24年は6月下旬から10月にかけて平年以上の高温が続き、特に平成22年と24年は積算最低気温がもっとも高くその結果低糖分につながったようだ。

低糖分への対策として適正な輪作体系の実施による連作回避、適切な堆肥施用による地力維持、土壌診断結果に基づいた適正な施肥管理、適期の防除を敢行する事が重要である。

(札幌支店)

異動のご挨拶

~ 当社 前常務取締役営業本部長 高橋繁治

この度、異動を命ぜられ、6月末より糖蜜や飲料用エタノールを取扱う三菱商事(株)無機原料部の関係会社に向向することになりました。3年間に亘り肥料販売に携わることで日本農業の厳しい環境を知り、同時にこの変革に対応され努力を続けられる生産者の皆様の新たな息吹を感じることも出来ました。そして何よりもこの3年間に多くの素晴らしい方々に出会うことが出来ましたことを嬉しく思うと共に改めて感謝申し上げます。

今後とも三菱商事アグリサービスをどうぞ宜しくお願い申し上げます。MACジャーナルをご愛読戴いている皆様のご健康とご発展を心よりお祈り申し上げますお別れのご挨拶とさせていただきます。本当に有難うございました。

今年的大型連休は概ね天候にも恵まれて、リフレッシュするにはとてもいい休日でしたね。東京観光が人気とニュースでやっていましたが、例年に比べても街中の人手が多く賑わっていました。皆さんは、どこかにお出掛けになりましたか？

編集事務局：南部、助川